
さよなら。

ナナエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよなら。

【Nコード】

N8198Z

【作者名】

ナナエ

【あらすじ】

最後の月牙天衝・『無月』を用いて、靈力を完全に失うことになってしまった一護。ルキアは、そんな彼に、薄れていく靈圧を感じながらも「さよなら」を告げる。そして、一人、尸魂界へと戻ってきたのだった。

十三番隊隊舎の廊下で、ルキアは柵に前のめりによりかかって、ぼんやりと瀟霊廷全体を眺めていた。

「ルキアー」

「む……？」

声が聞こえ、横に視線をやると、遠くから恋次が歩いてきた。斬魄刀が腰に携えられていないのが、なんだか新鮮である。

「よう。戻って来てたのか」

「ああ。少し前にな」

前に視線を戻し、ルキアは流れてくる風に目を細める。そんな彼女の隣りに、恋次も同じように柵によりかかった。

「……戻ってきたってことは……」

「……ああ……一護の力は、もう……無くなった」

「そっか」

なんともなしに、恋次は自らの手を見つめた。

何度あの希少な人間と、拳や刃を交えたことだろう。そして、何度その力を認め合い、力を合わせたことだろう。

今ではもう、仲間だった。

人間と死神は違つと、信じていたけれど。それは事実でも、信じられる仲間だった。

彼等死神が、人間の彼に影響され、人間に近づいたのか。

それとも、彼が死神になったから、知らぬうちにあちらが死神としての意志ばかりであったのか。

しかし考えることはない。

どうせ、前者だろう。

「なーんか、変な感じだな」

くるりと体を反転させ、柵に背を預ける。

「たかだかあいつと関わってたのは、一年弱だぜ。それでこんな……お前がそうなら、私の感覚がおかしいわけではないらしいな」

天を仰ぐ。

平和を取り戻した瀨霊廷の空が、果てしなく広がっている。

「本当に、妙な人間であったな。あやつは」「なんつーか、めんどくせえやつだった」

わざとらしく顔を顰めてみせる恋次に、ルキアはクスリと笑う。

「だが、お前とよく似ていたぞ?」

「似てねえよ!」

ちっと舌打ちしたので、彼女はまた笑った。

どうしても、妙に言葉少なになってしまふ二人。

違和感があった。

今まで当たり前のように、自分達の周りで騒ぎを起こしていた厄介

者が、もうここには来ないということが。

考えてみれば、妙な話だ。

これまでも、死神としてやってきた中で、何人か除籍になっていなくなってしまう者がいた。

十年くらい友に仕事をしてきた者がそうなることもあったし、一週間くらいで突如としてそうなる者もいた。

しかし一護に限っては、一年も共になどしていない。

ましてや共に死神の仕事をしていたわけでもない。

ただ、こちらの面倒ごとに、彼が首を突っ込んできて、それを軽く手助けしたりしただけのことである。

恋次がそうであって、ルキアにしてみたって、死神の力が戻った時点で、最早関わりなど絶つてもいいはずだった。

彼女は死神で、向こうは人間だったのだから、これはもう必然的なことのはずだった。

その程度であるはずの者が消えて、気分が、妙で。

淋しいとか、心細いとか、悔しいとか、そういった感情とはまるでかけ離れている。

しかし、心のどこかに穴があいたような。そんな感覚。

「……………良い仲間だったな」

ポツリと呟いたルキアの言葉に、恋次は頷く。

「…そう……だよな」

いつもなら、あの一護だ。どうせまた、自力で戻ってくるだろうと思っただことだろう。

だが今回は、原因の大きさが、あまりにも違う。

死神の力全てと引き換えの、最大の月牙天衝・『無月』を放ったことで、霊力を着実に消耗させた一護の体。

そして、そこから安定期間はあったものの、例の因幡や望美の事件があつて、無理矢理使った霊力消耗の激しい技の数々。

それらを経て、一護の死神の力は、完全に失われてしまった。

目を覚ました後、わずか数分でも、彼から死神のルキアが見えたことが、寧ろ奇跡的だったのかもしれない。

あんな無茶をして、あのような失い方をして。

それで再び、一護が戻ってくるだろうなど、考えられなかった。どうしたって、不可能だった。

「…石田達にもちゃんと挨拶してきたんだろ？」

「？さらばだ？とだけ、言った」

？さらばだ？と言ったということは、？またな？とは言わなかったということだ。

その短い挨拶には、二度と会えないという確信があった。

「……そうか……そうだよな」

恋次も、きつとその場にいたら、そう挨拶をしてきたことだろう。

……いや。違う。

会えないと分かっている、？またな？と言ったかかもしれない。

今となってはもう、自分がどうしていたかなんて、想像したところでどうしようもないのだが。

ルキアはニコリと微笑んだ。

「本当……不思議と信頼できる、人間だった」

「……へっ、まーな！」

二人とも、笑う。

笑って、言葉に出さず、心中に止めた。

一護に出逢うことを、願いたいと。

*

ベッドの上で、目を覚ます。

起き上がって、何となく、押入れを開けた。

誰もそこには、寝ていなかった。

…寝ていたとしても、分からないかもしれない。

窓を開けて、外を見下ろしてみた。

人影がない。

幽霊の影も、どこにも。

化け物の姿も、どこにも。

「……………ま、当たり前か」

一護は面倒臭そうに頭を掻いた。
当たり前だ。

もう自分に死神や虚はおろか、ユウレイは見えないのだから。

霊力など、もう残っていないのだから。

『一護！』

「！」

名を呼ばれたような気がして、振り向いた。

誰もいなかった。

一護はなんともなしに、ただ微笑した。

力は無くても。あの世でもこの世でも。

時間は同じように、ただ廻る。

(後書き)

ブログにあげていた作品です。

訳あってパソコンを切れなくなったので、暇を持て余してこちらにも掲載させていただきました。

完全に作者の妄想です。

予想ですけど、浦原が一護の力を取り戻させるっていう話があるまでは、ルキアって現世組には二度と会えないって思ってるんじゃないかって。だって、そうじゃなかったら一護とあんな感動的なお別れしないじゃないですか() ()

ブログでもたしか、暇つぶしに書いたような覚えがあるので文章滅茶苦茶ですけど。個人的にはそこまで嫌いではない短編二次創作の一つです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8198z/>

さよなら。

2011年12月26日00時57分発行